

進化と創造を乗り越えるには 信仰と科学は両立可能か？

木村 真之介

2023年9月15日

凡そ祈禱の時に求むる所は、之を得んと信ぜよ、然らば爾等に成らん

マルコに因る聖福音 第11章24節



ハリストス復活！ 実に復活！

読むのがめんどろな人向けのまとめ：

1. キリスト教にキリスト教でないものを持ち込んではいけない。創造科学に類する疑似科学の否定と仮説にすぎない創造論への懐疑。
2. 科学的な事実は事実としてきちんと受け止めるべきだ。神が創った世界にケチをつけるのはよくない。
3. 世の中がどう変わろうとも強い信仰、揺るぎない信仰を持たなくてはいいけない。我々は初代教会から続いてきたのと同じ信仰を共有している。
4. 多くのキリスト教徒が進化論に懐疑的なのは、聖使徒等の証言を信じるという前提に立てば意外と論理的だ。決して頭が悪いわけではない。
5. 現代に生きる我々は、容易には解決できない新たな問題に直面している。容易に解決できないのだから自力で解決しようとしなくて神に祈ろう。

願わくは、この問題がすみやかに解決されんことを！ アミン。

※ この文書は信仰の書です。それほど科学的ではありませんのでご注意ください。

以上ですが、よろしければ続きもお読み下さい。

1 はじめに

2007年頃、創造科学批判の文書を作成しました。しかしこれは今の自分から見ると不適切な内容です。その後、2008年にキリスト教の正教会^{せいきょうかい}*1で洗礼を受けてから、10年以上経過し、改めて考えてみようと思いたちました。よろしければお付き合いください。

正教会は進化論に対してどちらかと言えば否定的立場の教会です。これには少々困っていました。筆者は進化論を否定することは愚かなことだと考えているからです。しかし、結局のところ教会は人々に対して「創世記の冒頭部分は素直に受け止めなければいけない」と教える他に道がないのだとようやく気付くことができました。主に感謝。

*1 英語ではオーソドックス・チャーチ (orthodox church) というくらい正統な教会です。

概要

この文書は、進化論をはじめとする科学的な事実は事実として受け止め、なおかつ教会の伝統的な教えを毀損^{きそん}してはならないという方針で書かれています。

まず、第一の結論として、教会の伝える教えを大切に守っていかなければいけないことについて説明します。次に、キリスト教正教会の教理と科学に関する問答を通して強い信仰をもたなくてはならないことを第二の結論として説明します。最後に、ただ単に強い信仰でかたくなに教えを守ればそれでよいというわけではなく、新たに取り組むべき課題が神から与えられたのだと理解して終わります。

願わくは主我が神よ、我が栄光欲を謙遜と溫柔に変えて、爾の栄光を現させ給へ。然れども我が欲する所に依らず、爾が欲する所に依りて成るべし。

目次

1	はじめに	3
2	進化と創造を乗り越えるには	6
2.1	第一の結論	6
2.2	進化と創造に関連する問答	7
2.3	第二の結論	23
2.4	新しい課題	23
2.5	解決は可能か?	24
2.6	今回の問題	26
2.7	結論	29
3	信仰と科学は両立可能か?	30
4	あとがき	32
4.1	正教会用語・人名など	33
4.2	編集履歴	33

2 進化と創造を乗り越えるには

2.1 第一の結論

結論は次の通りです。

1. 教会には旧約を土台として新約の教えを伝える役割がある。
2. 教会は伝承、つまり聖書を含む聖伝に基いて正しい教えを伝えなくてはいけない。
3. キリスト教なのだからキリスト教の伝承に基いて人々に伝教するのは当然である。
4. もちろんキリスト教ではない別の教えをキリスト教の教えとして用いることはできない。
5. キリスト教ではない別の教えに基いた教えであったならば、もはやキリスト教ではない別の宗教である。
6. 創世記には神がどのように世界をつくったかが書かれている。
7. しかし、創世記の記述と自然科学が教える内容は矛盾する。
8. そこで、この問題を解決するために、自然科学に基いてキリスト教を矛盾なく理解しようとする試みは、正しいことではない。
9. なぜならば、自然科学はキリスト教ではないからだ。

というわけです。

キリスト教の信仰を持つのであれば、創世記に書かれている内容は素直に受け取るべきであり、その通りであると信じなければいけません。もちろん単に文字通りに解釈するという意味ではなく、正教会の伝統的な解説に基いて理解を深める必要があります。

これ以上どのような説明ができるのでしょうか。 アミン、アミン。
なお、キリスト教の教えを伝えるための理解の助けとして、自然科学や他

の宗教に関する事例を取り上げる程度のことには問題ないと思います。

つまり、キリスト教に関係のないことは一切語らないというように極端に偏る必要も無いと思います。

正教会は生きている教会です。伝統的な解説というのは常にアップデートされ続けています。優れた神学者*2が現われ、この問題を解決してくれる可能性が残っているということは我々にとって希望のはずです。

2.2 進化と創造に関連する問答

次に、進化と創造の板ばさみ状態によって生じる思い煩いを軽減するために思念した結果を問答形式で書いてみます。現時点での筆者の理解にもとづいて書いています。

2.2.1 神は世界をつくったのか？

つくった。

2.2.2 神は人間をつくったのか？

つくった。

2.2.3 神は世界をどのように見たか？

よいものと見た。

2.2.4 神は人間をどのように見たか？

よいもの、きよいもの、愛すべきものと見た。

*2 ところが、聞くところによると正教会の神学者は創世記の記述と進化論についての整合性がどうかよりも、聖書の記述が人間にとってどのような意味があるのか、何が啓示されているのか、ということに関心があるので、この種の議論にはあまり関心がないようだ。

2.2.5 神は人間を愛しているか？

愛している。

2.2.6 神が人間を愛しているかどうかが進化と創造になんの関係があるのか？

神に愛されていると信じることができないなら、このような神話や伝説の類としか思えない創造や復活の話の信じることはできないから。^{*3}

2.2.7 神は世界をどのようにつくったか？

創世記に書いてある通りにつくった。

2.2.8 信仰と科学は矛盾しないのか？

矛盾する。

2.2.9 どこが矛盾するのか？

創世記を文字通りに解釈するなら世界はわずか 168 時間で完成したことになるが宇宙の誕生や地球の誕生、人類の誕生に要した時間は、創世記の記述よりもはるかに長い時間を要している。1 日の長さが可変だとしても創造される被造物の順番がおかしい。たとえば地に草木をつくってから太陽と月をつくっているが、太陽の方が先にできていないとおかしい。そもそも教会の伝承にある数々の奇蹟は科学的知識と矛盾する。矛盾しないとしたら奇蹟ではない。

^{*3} これは個人の意見ですが、神がこの世を愛しているかどうかと奇天烈な方法で世界を創造したことと何の関係があるのか、人間には知るよしもない。

2.2.10 進化をどのように理解すればよいのか？

神がつくった現実の世界で進化が起きているのだから、これが現実だと素直に認めるべきである。

2.2.11 進化は科学的事実なのか？

科学的事実である。

2.2.12 なぜ進化が科学的事実といえるのか？

進化論の手短な証明：

- 生物には必ず親となる生きた生物が必要だ。
- 生物は多種多様で互いにとても異なっている。
- 単純な生物は複雑な生物よりも古くから存在した。

上記をあわせて考えると複雑な生物は単純な生物から進化してきたと考えざるを得ない。

2.2.13 たったこれだけのことで事実といえるのか？

事実といえる。例をあげて考えてみましょう。

地球は丸い：

1. 太陽はずっと遠いところにある。
2. 高いところの方が遠くまで見える。
3. 夏至の南中時の太陽光線はアレクサンドリアでは少し傾いて届く
のに対して、もっと南のシエネでは垂直に届く。^{*4}

^{*4} 井戸の底に太陽が写る。

4. 地球は丸いに違いない。大きさも計算できるに違いない。

引力はある：

1. 地球は丸いに違いない。
2. 地球上のどの地点でも物体は地面に対して垂直に落ちる。
3. ならば地球の中心に向けてなんらかの力が働いているに違いない。

このような単純な事実を積み重ねて科学は発達してきました。それに対して、主の復活を証明するものは預言と聖使徒が残した福音だけです。進化論よりも遥かに弱い証拠です。創造にいたっては旧約聖書だけです。お察しのとおり古代人は決して頭の悪い人々ではありませんでした。

2.2.14 創造の証拠は旧約聖書だけでなく科学的な証拠も存在するのではないか。

それは創造論的な思い込みです。それならば上記の進化論の手短な証明以外にも進化の証拠はたくさんあるでしょう。しかし、この文書の目的から外れるので、この疑問に関しては科学的に創造論を否定している他のサイト「進化論と創造論 ～科学と疑似科学の違い～」(<http://natrom.sakura.ne.jp>)などを参照してください。

2.2.15 創世記の冒頭に書かれている内容は科学的知識と矛盾する。どのように理解すべきか、なにか象徴的あるいは寓話的なものとして捉えるべきか？

象徴的・寓話的なものとして捉えるべきではない。^{*5}

^{*5} ただし教会の聖なる伝統・伝承、つまり聖伝にしたがって解釈すべきである。とはいえ、伝統的な解釈というのは時として現代人には受け入れがたいものも含まれるので、吟味する必要が出てくる。このとき自分勝手に吟味するのではなく司祭と相談しながら納得

2.2.16 ではどのように捉えるべきか？

素直に、書かれている通りに受け止めなければいけない。しかし深入りしてはいけない。

2.2.17 なぜ書かれている通りに捉えなければいけないのか？

教会では主の復活が実際にあったと信じるから。

2.2.18 なぜ復活を信じると創世記を書かれている通りに捉えなければいけないのか？

次のとおりです。

1. 聖使徒等は復活した主に出会ったと証言した。
2. 彼らの証言を信じるならば主の復活は実際に起きたことである。
3. 主の復活は死に勝つためであった。
4. 死とは最初の人間アダムが神に対して罪を犯した結果である。
5. 創世記の冒頭に書かれている記述が現実のできごとでないなら主の復活は起こりえない。
6. 伝承では主は地獄に降り、死を滅ぼし、アダムを己と共に起し、諸人を地獄より救ったとされている。
7. 教会はこのようにしか伝えていない。

このように伝えられているので創世記の記述は科学的知識とは関係なしに現実的な事実として受け止めざるを得ない。あとはこの話しを改変せずに素直に信じるかどうかの個々人の信仰の問題でしょう。

できる形で心に受け入れるのがよいであろう。

2.2.19 なぜ深入りしてはいけないのか？

無益な空想に陥るから。時間を無駄にし、真の祈りを妨げる。悪魔はこれを望む。

2.2.20 悪魔はいるのか？

いる。^{*6}

2.2.21 創世記の冒頭に書かれた内容と科学的知識の間にある矛盾はどのように解決すればよいのか？

人間には解決できない。しかし神には解決できる。人間にできる解決策は神に祈ること。

2.2.22 なぜ矛盾するのか？

わからない。神のすることは人間の理解を超えている。神は矛盾しないが人間は矛盾する。人間は全知全能ではない。

2.2.23 つまりどういうことか、なにが言いたいのか？

人間はこのことで心配する必要はない。神が解決する。

2.2.24 神はどのように解決するか？

わからない。優れた神学者を遣わして万民に受け入れられるような解説を用意してくれると良いのだが、神学者はあまり興味を持たないらしい。ある

^{*6} 悪魔の存在を証明するのは神の存在を証明することができないのと同様にできないことだが、しかし、神よりもむしろ悪魔の方がより身近に感じることができるのは不思議である。悪魔は誘惑者であって人間を誘惑する。一見良いアイデアを心の中に思いつかせて誘惑し善なる神から離れさせ最終的に絶望させたり傲慢にさせて永遠の生命から遠ざけようとする。

いは人々の心を養って誰もがこの問題につまずかないような社会の変化をもたらすことなどが考えられる。

しかし、例えば、人間にとっては矛盾して見えるできごとでも、神にとっては矛盾していないものとして理解できるかもしれない。^{*7}つまり、神に比べて人間はとても小さいので、この世界を限られた尺度でしか測ることができない。だから人間にとっては創世記における生物の創造の記録と科学的な進化論的説明は矛盾しているように見える。しかし、神の視点から見たら互いに矛盾していないのではないだろうか？

月はとても遠くにあるので歩いていると自分についてくるように錯覚してしまう。ある人が東に歩いていて、自分についてくる月を見て、月がついてくると言っても嘘はついてないが、別のある人が西に向かって歩いている場合、その人も同様に自分に月がついてきていると錯覚するので、矛盾していると考えよう。

しかし、月はとても遠いので、どの方向に進んでも自分についてくるように見えるのだと言う知見を得れば矛盾しているのではなく錯覚しているのだと気が付ける。同じように神のわざはとても大きいので人間の尺度では測り知れないのだと気が付けば一見矛盾することでも神の尺度で見れば矛盾していないのではないかと想像することはできるだろう。

2.2.25 社会の変化とは学校で創造論を教える事か？

それは反対につまずきになる。その結果この文書を作成することになった。

^{*7} この「人間の目には矛盾でも神の目には矛盾ではない」という考え方は間違えると「疑問を持つ心」を封じてしまう可能性があり注意が必要です。矛盾を無視してよいのではなく矛盾と向き合う努力をした上でこのような結論を得るというプロセスが大切かと思えます。自分の力ではどうすることもできないことを自覚し謙遜さを失わないように神により頼む姿勢が大事かと思えます。

2.2.26 ではどのような社会の変化を期待しているのか？

進化はなかったと目くじらを立てて主張する人々がいなくなる平和な社会。

2.2.27 そのような社会は実現するか？

あと1~2世紀もすれば進化論を否定しようと思う人は、現在、地球が太陽を周回している事実を否定する人がほとんどいないのと同様に、ほとんどいなくなるでしょう。

2.2.28 そのためには何が必要か？

科学的に正しい教育と宗教的に正しい教育を全ての人が受けられるようにすること。

2.2.29 宗教的に正しい教育とは学校で正教会の教理を教えることか？

日本であれば仏教、神道、キリスト教、イスラム教など代表的な宗教の教理を可能な限り正確に知る機会を与えること。同じ宗教でも宗派・教派ごとに違いがあることを認識できるようにすること。

進化と創造の対立構造では進化論を支持する側は宗教的知識が無さ過ぎるために相手の意図を読み取ることができずに困惑し、キリスト教徒でさえ自分の宗教の立場を正確に知らないために誤解によって進化論を否定あるいは肯定するという的外れな状態に陥っていないでしょうか。

2.2.30 創造科学に類する疑似科学にはどう向き合うべきか？

避けるべき。

2.2.31 科学と信仰は両立させる事ができるのか？

むしろ対立させる必要は無い。

2.2.32 しかしどうしても気になる、どうすべきか？

祈るべき。

2.2.33 どう祈るべきか？

信仰が強められるように祈るべき。

2.2.34 信仰が弱いというのか？

救いへの確信が得られないから気になるのではないのでしょうか。

2.2.35 いや、そうではなくて、これをどう理解すればよいのか分からなくて困っているのだが？

それは、筆者も同じです。自分自身の理解の助けのためにもこの文書を作成しているのです。

2.2.36 進化と創造について人に問われた場合なんと答えれば良いか？

わからないと答えればよい。

2.2.37 きちんと答えるように問い詰められたらなんと答えれば良いか？

信じている通りに答えればよい。

2.2.38 進化はあったと思う。人に責められるのではないか？

堪えるしかない。

2.2.39 創造論を信じている彼等は愚かではないのか？

7世紀の聖人シリヤのイサクによれば熱心^{*8}とは人間にとって不健康な状態だそうです。彼等は尊敬に値する強い信仰の持ち主ですが、不健康な状態なのだろうと思います。しかし、天国はそんな彼等のためにも開かれているはずで、彼等は神のことばである聖書を文字通りに信じているのですから、信仰的にある意味では正しいのかもしれません。もちろん私達が抱いている葛藤を経験していないと言う点では幼いと言えるでしょう。分けて考えると言う解決策は好きではありませんが、「これはこれ、それはそれ」と分けて考えることが必要な場面もあるでしょう。成長のひとつの段階にあると理解すべきかもしれません。

2.2.40 進化は正しいと思う私は天国に入れぬのか？

正教会の教理に基いてイエス＝ハリストスを主＝神と認め、口で告白し、信じ、洗礼を受け、教会の戒めをまもり、死に到るまで信仰を捨てず、神に対して罪を犯さず、罪を犯したなら痛悔し、ふさわしい状態でハリストスの聖体を受けたなら天国に入れる。

^{*8} 別の翻訳では「熱心」ではなく「嫉妬」となっている「らしい」ので、単純に熱心であることが即ち不健康であると理解するべきではないかもしれない。

2.2.41 これでは正教会以外の教会の人は天国に入れないように読み取ることができるとか？

教会は一つです。分派や分裂は認められません。「狭き門」*⁹から入るべきです。彼等が救われるかどうかよりも自分の心配をすべきです。

2.2.42 天国に入るための条件が厳しすぎるのではないかと？

簡単に入れるなら天国の価値は低いかもしれませんが、そこまで厳しいとも思えないので、人それぞれハードルの高さが違うというだけなのではないでしょうか。

2.2.43 聖体を飲食しさえすれば天国に入れるというのは、むしろ天国に入る条件が簡単なのではないかと？もっと高尚な何かが必要なのではないかと？

聖体はこの世界で最も高尚な物体です。至って聖なるものです。簡単なことではありません。

2.2.44 進化を信じるかどうかに関わらず普通の人間が天国に入るのとは不可能なのではないかと？

天国に入れるかどうかは神が決めます。神との約束を信じてこのように行うしかありません。*¹⁰

*⁹ マトフェイ伝 7:14 「命にいたる門は狭く、その道は細い」について、ある司祭は狭き門とは正教会のことであると解説していました。反論はありまじょうがそういう解釈もあるということです。正教会内部でも他教派にも救いはありうると考える穏健派と呼ばれるグループとそうでないグループがあります。筆者は穏健派ではないので他教派に救いはないと考えるのです。これは前提です。この前提の上で単純に自教派は救われて他教派は救われないと白黒はっきりした問題とは限らないとも考えており一種の万民救済的な可能性をまるきり否定しているわけではありません。

*¹⁰ 救いは神と人の両方の合意というか協働・共働によってなるそうです。

2.2.45 進化は正教会の教理に反するのではないか、正教会の信仰を持つことは不可能なのではないか？

信経：ニケア・コンスタンティノーブル信条には進化論に矛盾する記述はありません。

2.2.46 進化を信じることは不信仰の罪ではないのか？

単に科学的な知識として進化は正しいと信じているのであれば 不信仰の罪にはあたりません。しかし、教会では死が罪の結果であると教えています。これを否定してしまうと不信仰の罪にあたります。また、別の罪に陥っていないかを考えるべきです。

2.2.47 別の罪とはなにか？

食欲を満たすように知的好奇心を満足させたいだけではないか、進化を否定する人に対して怒りを覚えていないか、必要以上に思い煩っていないか、問題を解決することによる栄光欲が心に潜んでいないか、傲慢になっていないか。

2.2.48 なぜ不信仰の罪にあたらないのか？

この矛盾は人間には解決できないからです。つまり神が解決する問題です。だから人間はこのことで心配する必要はありません。

2.2.49 なぜ人間にはこの矛盾を解決できないのか？

できないからです。教会の伝える天地創造の記述と科学的事実とは矛盾します。矛盾するふたつの事柄を、片方もしくは両方を改変せずに、矛盾しないようにすることは人間にはできません。

2.2.50 なぜ神はこの矛盾を解決できると言えるのか？

神にできないことはないからです。^{*11}

2.2.51 正教会の教理では創世記の冒頭部分をどのように解説し理解しているか？

世界は、父と子と聖神^oの一体にして分かれざる聖三者によって創造された。父だけでつくったのではない。子も聖神^oも世の始まる前からいた。子も聖神^oも被造物ではない。世界は完全に無からつくられた。つまり事前に原料があり、なんらかの材料を利用してつくられたのではない。天とは見えない世界、神と天使等の世界、人間には知ることをできない世界のことである。天使には神に似せて自由な意志が与えられた。自由な意志によって神のようになりたいと欲した天使は神に反した。これが悪魔である。悪は神によってつくられたのではない。自由な意志を与えられた者が神に反するという選択をしたことから生じた。地とは人間の世界、見ることをできる世界、人間が知ることをできる世界、この世、時間や物質的な性質に縛られている世界である。天は地と違い時間や空間といった概念で縛られることのない永遠無限の世界である。だから悪魔は永遠に悪のままである。人間のように限られた時間の中で神から離れたり悔改めて神に立ち返ることはない。同じように、人がその人生において神を選んだなら、死んで復活して永遠の生命に預るとき、その人は永遠に神と共にある。しかし、人がその人生において神を選ばなかったなら、死んで復活するときは神を目の前にしながら永遠に神を否定し続ける状態となる。これを地獄という。神は世界と人間をけがれた悪いものとしてではなく、善いものきよいものとしてつくった。そしてこれらを愛している。

^{*11} しかし神は矛盾することはできない、というよりもなさらないので、本当に神はこの問題を解決してくれるのか、解決する気があるのか、疑問を生じる。人間の目にはどうしても信仰と科学は矛盾した両立し得ないものに見えるから神の知恵が必要なのだが・・・

1日は文字通りの24時間ではなく一定の期間を表す「時代」や「紀」として理解する。現代は第7日目の時代である。つまり第7日目は現在も継続中である。主の復活は8日目のできごととして理解する。世の終わりとは第7日が終るとき。復活後の来世の世界は8日目として理解する。つまり日曜日=主日は1日目であり8日目でもある。

神は神自身の「肖」と「像」に従って人間つまりアダムをつくった。「像」は自由な意志、良心、神を求める力、神に近づくための出発点。「肖」はその実現や完成としての「神に似たもの」を意味する。人間は最初から完成されたものではなく成長するものとしてつくられた。人間には神の息が吹き込まれ、霊的なもの「たましい」(あるいは神^{しん})が与えられた。人間は肉体と霊「たましい」(神[°])*¹²がひとつになった状態、生きている状態が本来の姿である。「死」とは肉体とたましいが別れた状態である。人間にとって死は「つくられたときの本来の姿」とは違う不自然な状態である。神は人間に子を産み育て世界を管理するように命じた。子供を作らず資源をむさぼる生活は良くない。神は女を男の助け手としてつくった。人が独りでいるのは良くない。男には女の助けが必要だ。楽園では神と人間が共にあった。よいところであった。^{*13}天国に入るということはこの楽園よりもさらに優れた天に到

*¹² 正教会の理解では人間は「肉体」と「霊」(たましい)と「神[°]」(しん)の三つから成り立っている。(コリント前書 15:44.) (人によっては「肉体」と「魂」と「霊」などと言うが同じである)「霊」は理性、知性、感覚、感情、美や喜びといった精神的な要素を与える。「神[°]」は人間に神を求める力、天に向かわせる性質を与える。どのような文化に属していても人間は神聖なものを求める性質が見出せるのは神[°]によると考えられる。これは至聖三者の神「聖神[°]」とは別であるが、いわゆる「霊魂」と神[°]は区別する必要がある。神[°]を病んでいる人は神と教会を深く憎むような状態となる。精神に全く異常が無くても神[°]を痛めて病んだ状態は悪霊に支配された状態といえる。精神病は医療による治療が必要であるが、神[°]の病気は祈りによる治療が必要である。また、単に理性的に神や教会を否定することは神[°]の疾病ではない。例えば聖使徒パウエルはキリスト教を迫害していたが、復活したイイスス・ハリストスと出会い改心している。もし、神[°]が損なわれていたらたとえ神と出会っても改心しなかったはずである。

*¹³ 楽園はよいところであったが、あくまでも地上のものであったので天に到る道に比べると、人間が楽園を追われたのはある意味ではよいことでもあったと言えるだろう。

ることである。

蛇は誘惑者つまり悪魔である。女は誘惑に従い神に反した。つまり罪を犯した。男は女に従い罪を犯した。男は罪を女のせいにした。女エヴァは蛇のせいにした。人間は神に許しを請わなかった。悔い改めなかった。結局人間は自由な意志をつかって罪を犯した。罪の結果として世界に死が入った。しかし神は人間を救うためにハリストスの死と復活についての預言をした。彼は死に降り復活し悪魔を踏み破ると。

神の似姿としての「肖」は罪によって失われたが「像」は完全には失われなかった。

パンを裂く儀式、つまり聖体礼儀とは1日目の創世から8日目の主の復活までを再現し、今生きている人間を聖体によって神と一体とし天に属している状態に遷すという奥密な儀式である。神は、最初の間が善悪の知識の実を食べることによって死ぬものとなったように、今生きている人間がハリストスの聖体を食べることによって生命を得るという奇異な方法で救いを実現している。

2.2.52 1日目から第6日目についての解説は？

1日目^{*14}から第6日目については、筆者も詳しくは知らないので神父さんに聞いてみて下さい。

2.2.53 これは宗教だ。科学ではない。分けて考えるべきではないのか？

そうですね。いや、待ってください、むしろ分けて考える必要はないかもしれません。

^{*14} The Orthodox Study Bible の創世記にも一日目の日数には“the”が抜けていて「第一日」ではなく「一日」と表現するのだが、何の意味があるのかはわからない。

2.2.54 分けて考えないでどうして平静でいられるのか、精神が引きちぎれてしまうのではないか？

科学的事実を事実として認めながら、教会の教えを信じて、肉体はちぎれない、心もひとつのままです。^{*15}精神が引きちぎれてしまうと感ずるのは、神ではなく自分の力を頼み、自分の力でなんとかしようとするからではないでしょうか。これは思い煩いの罪といひます。強い信仰を持つべきです。^{*16}強い信仰というの思ひ込みとは違ひはずです。

2.2.55 そのような、全てを乗り越えたような、強い信仰を持つことは可能なのか。

人間にはできなくても神にはできます。理由は何であれ、打ちのめされて、信じられなくなつて、それでも何度でも立ち上がつて、^{*17}信仰を守つていかななくては行けないのだと思ひます。

2.2.56 あなた自身はどうなのか、あなたはこの通りに信じているのか？

筆者が忠実に信じているかどうかと、あなたの救いとの間になんの関係があるのでしょうか。確かに筆者にこのような強い信仰があつたら思ひ煩うこともなくなるのでしょうか。

^{*15} ふつうは大丈夫なのだが、人によっては精神に異常を起こしてしまう可能性もあり、難しい問題である。

^{*16} すぐれた信仰をイメージしたときに、鏡のような静かな湖面を思ひ浮かべるかもしれませぬ。しかしこのような水面は小石を投げ込んだだけで波紋が広がってしまうはかないものです。そうではなく、強く固い信仰とは荒海の中でも動かない大きな岩のような状態だそうです。

^{*17} 箴言 24:17 「正しい者は七たび倒れても、また起きあがる」。

2.3 第二の結論

強い信仰があればなにも心配しなくてよい。教会の言うことは1世紀の頃から変わっていません。大切なことは紀元前から変わっていません。疑いの心、願いが聞き入れられないことへの不満、私達はこういった不信仰の罪からはなかなか逃れる事ができません。しかし、それでも揺るぎない信仰を持つべきなのでしょう。 アミン、アミン。

2.4 新しい課題

ここから先は、筆者が思いついた単なる仮説なので、あまり真に受けて欲しくないのですが、思考の記録として書き残します。

二つの結論を見ました。キリスト教にキリスト教でないものを持ち込まない。強い信仰を持つ。

そうです。全くその通りです。しかし、良く考えなくても、これは当たり前のことです。そんな簡単に解決できる問題なら社会問題にはならないはず。これは、聖像破壊運動やグレゴリイ・パラマに匹敵するキリスト教史の上の大きなイベントが発生していて、我々はその渦中にいるということではないでしょうか？すると、さらに第三の結論が必要なはず。まさしく優秀な神学者を神が遣わしてくださらないと解決しなさそうです。

2.4.1 なにが問題なのか

さて、問題は：

1. 進化は実際に起きたことのように。人間は進化の結果できたようだ。
2. ハリストスの復活も実際に起きたことのように。
3. ハリストスの復活が事実なら創世記の記述もまた事実のように。

しかし、1 と 3 は矛盾するようです。どうやって解決すればよいでしょうか？

進化はなかったと確信して良いに違いない

これは現実的な問題として捉えると間違い。

ハリストスの復活がなかったに違いない

これは単なる異端。キリスト教ですらないと思う。

神は新しい課題を人間に与えたいらしい

これはどうやら確からしい。^{*18}

現実に目を背けるのも嫌だし、異端に走るのも嫌だし、無神論者になるのも嫌です。嗚呼、困った。神様助けて。このような状況ではないでしょうか？

これは過去の聖像破壊運動やパラマ論争に匹敵する難問のように思います。しかし結局のところどちらも教会の伝統的教えが勝ってしまいました。だから今回も似たような決着になるだろうと予想はできます。

そう考えれば安心です。この課題をこなせば人間は神についてよりよく知ることができるのですから悲観する必要はありません。神よ我等を救い給へ！

2.5 解決は可能か？

一見すると解決不可能です。

しかしながら、過去の事例を取り上げて、全く望みがないわけではないことを確認していきましょう。

^{*18} 曖昧な表現になってしまったが、「確からしい」という希望を持ちたいと言うべきかもしれない。

2.5.1 聖像破壊運動

8世紀から9世紀にかけて発生したキリスト教史に残る重大な事件です。神を描いてはいけない。彫ってもいけないハリストスは完全な人でもあるが完全な神であるイコンは描いてはいけないものを描いた偶像であるハリストスが完全な神であるなら描いてはいけません。人であるなら描くことができます。どうしたらよいのでしょうか？

伝統的にイコンは当然のように用いられましたから、恐らく7~8世紀にかけてなんらかの社会的変化があったのでしょう。

聖像破壊運動の結果、イコンは偶像ではないという結論が出されました。この成果は大齋第一週目の日曜日を「正教勝利の主日」として記憶し現在でも祝われています。

ハリストスは完全な神でありながら完全な人でした。人としての性質を持ったことで描くことが可能になったのです。

人間とは何でしょうか。人間は神の似姿、神の肖と像としてつくられたものです。つまり、我々人間自身が神の像、生きたイコンであるというのが結論です。

これは、どんなに悪い人でもその人は神の像としてつくられた聖なるものであるという理解につながります。そして、自分がどんなに罪深い人間であったとしても自分は神の像としてつくられたのだから、自分の罪のゆえに神の救いを軽んじてはいけない、つまり「自分は救われるにふさわしくない」などと考えるはいけない。人間は神に愛され神自身の像に従って善いものとして造られたのだから、善を求め続けるべきであり、罪のゆえに救いを諦め罪を繰り返すべきではないということを再確認することにもなります。

また、本来ならば偶像ではないはずのイコンを偶像として扱うような異教的崇拝とも見做されかねない、決して好ましくない状況も一部ではあったと

言われています。^{*19} この議論はそれら異教的偶像崇拜のような状況の是正にも役立ったでしょう。

つまり聖像破壊運動は伝統的キリスト教徒にとっては悪夢のようなできごとでしたが、過ぎてみれば自分達の信仰をより確かなものとする試練だったのではないのでしょうか。

2.5.2 グレゴリイ・パラマ論争

14世紀に、グレゴリイ・パラマに代表されるアトスの修道士達は次のように証言しました。「人間は厳格な修行と絶え間ない祈りを通して、神との真の交わりを体験することができる」。本当にこのようなことが可能なのでしょうか、極めて非科学的です。人間が神と真に一致できるはずありません。結果はどうなったのでしょうか。

議論の結果、これは聖書と聖伝にもとづいて正しいことだそうです。神の本質を人間が知ることはできません。しかし、神のエネルギーは人間に体験できるというものです。人間とは何でしょうか。人間はつくられたとき、神の霊、息を吹き込まれたので、体と「たましい」の両方をもっています。体は物質的でこの世的なものです。しかし、霊的なものである「たましい」に形はなく、永遠無限の神とつながり得るといふのです。

筆者は厳格な修道生活を実践したこともないし神の光を見たこともないのでなんとも言えません。しかし、できると言っている人が実際にいるのですから信じるしかありません。

2.6 今回の問題

もういちど今回の問題を再確認しましょう。

^{*19} ◆第8世紀◆イコン論争「実際「敬虔」な人々の中には偶像崇拜や異教的礼拝スレスレの行き過ぎたイコンへの執着があった」
<http://www.orthodox-jp.com/westjapan/history/hist8.htm>

聖使徒等の証言によればハリストスは 霊魂や幽霊のような無実体な形体ではなく実体的な肉体をともなって本当に復活したらしい。

ハリストスの復活は旧約聖書における預言の成就であり、最初の人間アダムが犯した罪の結果、即ち「死」に勝つための最大級の奇蹟であった。

つまり創世記の冒頭の記述は象徴的、寓話的な教えではなく、実際に起きたこと、現実的なこととして捉える必要があるらしい。

創世記の冒頭を現実的な問題として捉えるならば、人間は進化などの間接的方法ではなく神によって直接つくられたと理解すべきだ。

ところが、進化は実際にあったし、人間は進化の結果としてつくられたというのも事実らしい。

全てが嘘で信仰を捨てた方が良いということだろうか？

しかし、聖使徒以降の過去から現代までに記憶されている聖人たちは病気を癒す奇蹟を示したり神についての様々な証言をしている。

そして私共は神を信じることに決めた者の集まりなので神を信じずにはいられない。

であるならば、創世記の記述についてより深く理解する必要があるはずだ。

もし本当に神がいるならば、神は人間に御自分のことをより深く理解して欲しいと考えるのではないか、そこで新しい課題を人間に与えたのではないか。

それならば、「科学と信仰の板ばさみでつらい」とか「進化はまちがってる」とか「科学と宗教は別だから」とか「復活はなかった」などと考えるのではなく、「ああそうか、この困難を乗り越えたなら、より深く神を知ることができるのだな、それはとても豊かな希望だ」と考えた方が、より健全な信仰生活を送ることができるのではないのでしょうか。

2.6.1 注意点

このような課題を提示されると、ああでもないこうでもないといついえ込んで頭の中がグルグルと混濁してしまいます。

普通に考えたら解決不可能です。

余計なことは考えない方が良いのです。神学者の仕事です。筆者には無理なのです。悪魔の誘惑なのです。真の祈りを妨げるのです。神よ我を救え！^{*20}

哲学や自然科学、一般の論理とは違い、キリスト教の問題です。解決には祈りが不可欠です。祈禱を怠り、自分ひとりの頭の中で考えるばかりならば、単なる仮説や空想にすぎません。

たとえば「神は進化という間接的方法で人間をつくったと解釈する余地があるのではないか？」とか「光あれというのはビックバンのことだったのだ」といった考えは仮説です。

仮説ではなく正当な教義・教理として認められるには万民に納得できるというだけでは不十分です。聖書と聖伝による確かな裏づけがあり、正しいと信じるに足りるだけの検証が必要となります。聖使徒フォマの「我が指を釘の跡に入れず、我が手を其脇に入れずば、信ぜざらん」^{*21} という態度はとても大切なことです。奇蹟の二つ三つくらいは余裕で起きてくれないと納得いきません。そして、キリスト教であるならば、単に科学的に矛盾しないことが重要なのではなく、それが主イイスス＝ハリストスの死と復活、私自身の死と復活と永遠の生命に確かに関係があると説明できなければおかしいということです。さらに、「伝統的な信仰の持ち方は間違っていなかった。初代教会からずっと続いてきた信仰と全く同じ信仰を確かに私も共有しているのだ」と確信できる説明が必要なのです。^{あるい}或は、筆者が知らないだけで既にこの問題に関する取り組みが始まっているのかもしれませんが。筆者には自分の力で解決することはできないでしょう。しかし問題の解決を祈ることはできます。

^{*20} 神に対して命令形を使うのは、連禱の「主、憐れめよ」に倣っている。親しい者への命令形である。

^{*21} イオアン伝 20:25

2.7 結論

自分独りで考えるべきではありません

教会は自分ひとりだけで考えるところではありません。人に相談するのは必要なことです。神父さんに相談しましょう。もちろん神父さんも全知全能ではありませんから知りたいことについての的を得た答えを与えてくれるとは限りません。

筆者も科学と信仰のことで、どう理解したらいいのかわからないと神父さんに相談してみました。この質問に対しておよそ次のようなアドバイスをもらいました。

難しくてなかなか理解できないことを理解できるように神様助けてくださいとお祈りをして福音書や書簡を繰返し何度も読んでみてください。福音には神の言葉が書かれています。サロフの聖セラフィムは毎週福音を読みました。月曜日はマトフェイ、火曜日はマルコ、水曜日はルカ、木曜日はイオアン、そして金曜日は聖使徒パウエルの手紙。言葉の海の中を魚が泳ぐように神の言葉を心に感じ取って下さい。

私達の信仰はとても弱い。弱いから倒れる。でもまた起きて立ち上がる。これの繰返しです。繰り返して強くなる。石のように強い心、強い信仰があればなにも怖くありません。

今の時代は信仰を持つには難しい時代です。1世紀2世紀の頃は聖使徒や聖使徒師匠達の時代でしたから、どんな疑問にも答えてもらえたでしょう。今はどんどん信仰が弱くなっている時代です。しかし神の働きというものはどの時代でも変わることはありません同じです。

ということなので、あまり聖書を読むのは好きではありませんが、しかたありません。これからもっと聖書を読んでみて何か理解できたことがあれば、また書きましょう。神や光栄は爾に帰す。アミン。

3 信仰と科学は両立可能か？

筆者の解答：

人間の能力では科学と正統的なキリスト教の信仰を両立させることはできない。しかし、「神にできないことはない」という信仰によってのみ両立させることができる。ただし、自分の力ではどうすることもできないという遜りと神への信頼が伴わないならば、この解答は詭弁に過ぎない。

おわり。

別解：

信じていることが科学的に正しくないことを知りながら信仰を捨てない人というのは、頑迷なだけかもしれないが、奇妙なことに科学と信仰を両立させていると言えなくもない。

おわり。

前提条件：

1. 信仰があること。信仰を捨てないこと。
2. 事実は事実として認め現実の世界に背を向けないこと。
3. 科学に限らずこの世のあらゆるものが信仰とは相容れないと知っていること。
4. 正統な教えとされているものを改変しないこと。
5. 科学と信仰を分離して考えていないこと。＊
6. はじめから不可能と決めつけて問題から逃げないこと。
7. 具体的な解決策があるという希望を捨てないこと。
8. どんなに努力をしても自分の力では解決できないことを痛感していること。

「神にできないことはない」というのは一見、論理的には正しいようだが、

神は矛盾したことはできない、いやむしろなさない、という理解も必要となる。

この論理は筆者を非常に悩ませる。というのも単純に「神にできないことはない」のだから解決も可能と言えらると思つたのに、神は矛盾を解決してくださらないのではないかと不安になる。どうしたものか。しかし、実際に役に立つ解決が与えられるに違いないという神への信頼と希望を持つことが必要なのでしょう。

※ 冗長な補足説明：

「科学と信仰は両立可能」と言いたいがために「科学と信仰を分けて考えるべき」または「同列に扱うことはできない」という説明のやりかたは問題の解決になっていません。

このような表現は論理的で正しい考え方のようにだが 実際には問題を見えにくくするだけの役立たずな言葉のあやでしかないと思います。我々が直面しているのは「宗教と哲学と科学では取り扱っている範囲が違う」というだけで済む問題ではないはずで。

キリスト教徒は「聖使徒は復活した主の姿を肉眼や手で触れて観察し復活が事実であることを確認した」と信じています。

実際に観察したのだから科学的事実と同質で、いちいち「科学的」という必要もないくらい的事实だと思つるのは当然であります。

しかし、当事者にとっては「科学的」事実でも、後世の我々にとっては常識的あるいは科学的に考えれば起こりえない事象です。

したがって、我々としては各個人の判断で科学的に「信じない」か、非科学的に「信じる」か、あるいはいわゆるギャンブラーの理論^{*22}で「信じることにする」かを選択することになるでしょう。これも当然であります。

主の復活は創世記における人間が犯した罪の結果である「死」に打ち勝つためのものだったと伝えられています。だから、主の復活が事実なら創世記における人間の罪と死に関する記述も事実として受け止めるのは当然です。これを否定したら我々の信じている永遠の生命もないことになりま。

そしてもちろん創世記の記述も聖書に記された他の奇蹟も科学とは両立しない。つまり結局のところ常識的には科学と信仰は両立し得ない。どうしても両立させた

^{*22} 「パスカルの賭け」ともいうが、これはそもそも神の存在を前提として既に神を信じているからこそ選択可能な賭けである。

いのであれば「神にできないことはない」のだから「神様なんとか両立させてください」と祈願するくらいしか方法はありません。

それに、必ずしも理路整然と厳格に論理的で科学的に正しく両立させる必要はないように思う。ただ単に「天国で神と共に永遠に生きるものでありたい」という希望を持って残りの人生を過ごせば良いだけなのではないかと思うのです。どうして科学と信仰を両立させようとして色々な新理論を打ち立てる必要があるのか疑問を感じます。だから、いったいなにがしたいの？「結局なにが問題だったの？」と問い直したい。そして恐らくその答えは、筆者の場合は「正しい信仰のありかたについて考える訓練をしてみたかった」ということになるのでしょう。

なるほど、そう考えればこの問題に取り組むことは必ずしも悪いことではありません。しかし、この程度で納得できるなら大した問題にはならないはずで、実際には信仰を捨てたくなるのは当然と思えるほどの大問題でした。だから、この問題について取り組むことは永遠の生命を失うかもしれないという危険の伴う作業だと考えて慎重になるべきだと感想を持ちました。

かといって問題を認識しながらウヤムヤにし続けるのは正しい信仰を持つことにつながらないと思うので信仰面での成長に応じて霊的指導者に相談しながら熟慮を重ねていくのが良いと思うのです。それで結局やはり当たり前の結論にたどり着いてしまいました。自分の神父に相談すべし。

おわり。

4 あとがき

日本においては進化と創造のことで実際に困っている人はそれほど多くはないと思うので、この文書の必要性には疑問を感じています。しかし、面白そうなので書いてみたいという欲求もあったし、正教会の教理をよりよく理解するための訓練にもなると思うので作成しました。

筆者は教会で教えられた内容を自分の理解に基づいてこの文書を作成しましたが、素人ゆえに過不足や誤りがあると思います。筆者にできるのはここまです。ここから先は司祭や神学者の仕事です。

科学が教えてくれる地球 46 億年の歴史はとても偉大で感動を与えてくれます。宇宙はさらに大きい。これらの科学的事実を知ったときに、神は偉大

だと素直に認め神を畏れ敬い讃め崇めることは、主の目の前に尊いと思います。科学的な事実を事実として信じることができず、信仰の故に他者から愚かだと馬鹿にされ非難され見下され悲しむこともまた、主の目の前に尊いのかも知れません。

そして、智恵の足りない自分に智恵を与えて理解できないことを理解できるようにして下さいと祈りながら、福音を読み続け神を探し求めることも主の前に尊いのではないのでしょうか。喜び楽しめよ、天には爾等の報い多ければなり。

この文書が他者の、そして誰よりも自分自身の助けとならんことを主、神に願う。ハリストス復活！

エフレム木村真之介

4.1 正教会用語・人名など

- イイスス・ハリストス → イエス・キリスト
- 聖神^o → 聖霊
- 至聖三者 → 三位一体の神
- イサアク → イサク
- マトフェイ → マタイ
- イオアン → ヨハネ
- パウエル → パウロ
- フォマ → トマス
- アミン → アーメン
- 聖使徒師父 → 聖使徒の弟子 つまりハリストスの孫弟子。

4.2 編集履歴

- 2012.04.27 作成 - 2012.05.06 (難者の主日) 更新

- 2013.03.08 教理に関する部分で、人間は「肉体」と「霊」と「神」からできているという脚注を追加。
- 2018.07.18 正教会の神学者達はこの問題に対する関心が薄いという脚注を追加。
- v0.01 . . . 2019.08.20 (α 版) 再度全体を見直すことにしたためのPDF化を見据えて再編集。
- v0.02 . . . 2019.08.20 - 2019.09.24 (α 版)
- v0.1 . . . 2020.12.26 (β 版)
- v1.0 . . . 2023.7.18
- v1.1 . . . 2023.9.15 人間の目には矛盾でも神の目からは矛盾ではないという説明について注意書きを追加。